



36

坊っちゃん

学習を広げる

夏目漱石

ねらい

- ① 主人公の性格を捉え、人物像を読み取ろう。
- ② 情景や人物の心情を読み取ろう。

予習のワーク

「読解の道しるべ」

「坊っちゃん」は、純粹で正義感にあふれた「俺」（坊っちゃん）が、その性格ゆえに実社会で衝突を繰り返していくさまを、明るくユーモラスに描いた夏目漱石の作品である。簡潔で、歯切れのよい文章を味わいながら、読み進めていこう。

1 「坊っちゃん」について

主人公である「俺」は、親譲りの無鉄砲な性格で、子供のときから損ばかりしている。両親からは持て余され、兄とも気が合わない。ただ十年來召し使っている清という女性だけから愛情と信頼を受けて育った。両親の死後、「俺」は兄から遺産を分けてもらって学校に通い、卒業と同時に持ち前の無鉄砲さで就職も決めてしまう。四国の中学へ数学の教師として赴任することになり、汽車の窓から涙ながらの清との別れをする――。

その後、単純な性格の「俺」は、複雑で裏のある教師たちとの人間関係にがまんできず、生來の無鉄砲さと正義感とを發揮して、ついに辞表をたたきつけて、清の待つ東京へ帰って来てしまう。

2 夏目漱石について

明治・大正ばかりではなく、日本の近代文学を代表する作家の一人である。人間の本質に鋭く迫る作品を数多く残した。「坊っちゃん」の他、「吾輩は猫である」「三四郎」「こころ」などの作品がある。

「読解の道しるべ」を参考にして書こう。

親譲りの な性格の「坊っちゃん」は、子供のときから損ばかりしていた。両親からも持て余されていたが、十年來召し使っている だけから愛情と信頼を受けて育った。

1 線の読み仮名を書きなさい。

- ① 動物に畑を荒らされる。 □② 二人で相撲を取る。
- ③ 田舎の祖母に会いに行く。 □④ 風邪を引いて寝こむ。
- ⑤ 下ろしたての足袋を履く。 □⑥ 珍しいお土産をいただいた。

2 線の片仮名を漢字で書きなさい。

- ① 建物の陰にカクれる。 □② 名前を聞きチガえる。
- ③ 宝石がヌヌまれた。 □④ もうダイジョウブだ。

3 次の各問いに答えなさい。

- (1) 次の――線部の語句と同じ意味の語句を後の□の中ら選び、書きなさい。

□① 無鉄砲なことをしてかす。

□② これ以上は先に進めないと観念する。

□③ 家が零落する。

損をする もて余す 向こう見ず
落ちぶれる あきらめる いたずら

(2) 次の——線部の語句の意味を答えなさい。

□① いたずらばかりするので、とうとう愛想をつかした。

□② 隣の家のガラスを割って尻を持ち込まれる。

□③ 彼は立身出世を見込まれている。

□④ 自分の手柄話をふいちょうとして歩く。

(3) 次の——線部の語句の意味として最も適切なものを後から選び、記号で答

えなさい。

□① 生来のなまけ者。

- ア 今まで イ これから先
- ウ 身についた エ 生まれつき

□② 舶来品として珍重される。

ア 立派であるとほめたたえること

イ たいへんほしがること

ウ 珍しがって大事にすること

エ 長く保存すること

□③ 各自随意に行う。

ア 人の意見に従うこと

ウ 思いのままであること

□④ 機械のしくみがわからず、閉口する。

ア 考え込むこと イ 困ること

ウ 苦しむこと エ やめること

□⑤ 彼は了見が狭い。

ア 考え イ 方法

ウ 姿 エ 様子

□⑥ 彼は淡泊な性格だ。

ア きびしいこと

イ 内容がないこと

ウ さっぱりとしていること

エ 広い視野に立っていること

(4) 次の①～④が類義語の組み合わせになるように、後の□の中から適切な漢字一字を選び、書きなさい。

□① 性分 □ 性

□② 異議 □ 異

□③ 時分 □ 時

□④ 出立 □ 出

案 節 氣 生 論 発 心

練習問題 1

教科書 p.264 上段 l.1 ~ p.265 上段 l.11

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをした、ときく人があるかもしれぬ。べつだん深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りることはできまい、弱虫やーい、とはやしたからである。人におぶさつて帰ってきたとき、おやじが大きな目をして、二階ぐらゐから飛び降りて腰を抜かすやつがあるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

親類の者から西洋製のナイフをもらって、きれいな刃を日にかざして友達に見せていたら、一人が、光ることは光るが切れそうもないと言った。③ 切れぬことがあるか、なんでも切ってみせるとうけ合った。④ そんなら君の指を切ってみると注文したから、なんだ指ぐらい、このとおりだ、と右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨がかたかったので、いまだに親指は手についている。しかし、傷痕は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽くすと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真ん中にくりの木が一本立っている。これは命より大事なくりだ。実の熟する時分は、起き抜けに背戸を出て、落ちたやつを拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三、四のせがれがいた。勘太郎は、むろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗り越えて、くりを盗みに来る。ある日の夕方、折り戸の陰に隠れて、とうとう勘太郎をつらまえてやった。① そのとき、勘太郎は逃げ道失つて、一生懸命に飛びかかってきた。向こうは二つばかり年上である。弱虫だが、力は強い。② 鉢の開いた頭を、こっちの胸へ当てて、A 押した拍子に、

□ III 「俺」が「無鉄砲」なことをした後でも、それをしなければよかったと思っていない、負けずぎらいな性格が表れている部分を、文中から二十文字書き抜きなさい。

(2) ———線②「はやした」、③「言った」、④「うけ合った」とありますが、それぞれの話部分を「」でくくるとすればどこからどこまでですか。文中からその初めと終わりの四字を書き抜きなさい。(句読点は含みません。)

□④	□③	□②
}	}	}

勘太郎の頭がすべって、俺のあわせの袖の中に入った。邪魔になつて手が使えぬから、むやみに手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が右左へ **B** なびいた。しまいに苦しがつて、袖の中から俺の二の腕へ食いついた。痛かつたから、勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足がらを掛けて向こうへ倒してやつた。山城屋の地面は、菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真つ逆さまに落ちて、**C** と言つた。勘太郎が落ちるときに、俺のあわせの片袖ももげて、急に手が自由になつた。その晩、母が山城屋にわびに行つたついでに、あわせの片袖も取り返してきた。

(夏目漱石『坊っちゃん』)

※1 つらまえる || 捕まえる。

※2 鉢の開いた頭 || 頭蓋骨の横回りの大きい頭のこと。

※3 足がら || 相撲や柔道で、足をからませて、相手を倒す技。

※4 六尺がた || 六尺ぐらい。一尺は三十三センチメートル。

(1) 線①「親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている」について、

次のI〜IIIに答えなさい。

I 「俺」の無鉄砲な性格がよくわかるエピソードを、二つ書きなさい。

<p>□ II 「俺」の「無鉄砲」が、いかにも「親譲り」であることがわかる、「おやじ」の言動を述べた部分を文中から四十字以内で書き抜きなさい。</p>	<p>□</p> <p>□</p>
---	-------------------

(3) **A**〜**C**に入る言葉として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------|---|------|
| ア | ぐう | イ | ぐいぐい |
| ウ | めらめら | エ | くいくい |
| オ | ぐらぐら | カ | くらくら |

□ A () □ B () □ C ()

(4) この文章には、どんな特徴がありますか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|------------------------|
| ア | やわらかな和語を多く使い、優雅な感じがする。 |
| イ | だじやれが多く使われ、ふざけた感じがする。 |
| ウ | 古い言葉もあり、漢文を読むような感じがする。 |
| エ | 簡潔で歯切れがよく、きびきびした感じがする。 |

() () ()

(5) 次の文章は、「坊っちゃん」の作者、夏目漱石についてのものです。

a〜cに入る最も適切な言葉を後から選び、記号で答えなさい。

夏目漱石は、一八六七年(慶応三年)に東京に生まれ、一九一六年(大正五年)に亡くなった作家・英文学者です。「高瀬舟」などの作品で知られる **a** と並び称される日本近代文学の代表的な作家で、人間の本性に鋭く迫る作品を数多く書きました。「坊っちゃん」の他に、「**b**」「**c**」などの作品があります。

- | | | | |
|---|---------|---|------|
| ア | 島崎藤村 | イ | 破戒 |
| ウ | 吾輩は猫である | エ | 森鷗外 |
| オ | こころ | カ | 山椒大夫 |

□ a () □ b () □ c ()

練習問題 2

教科書

p. 266 上段 l. 3 ~ p. 267 上段 l. 13

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

おやじは、ちつとも俺をかあいがつてくれなかった。母は、兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やに色が白くつて、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならない、とおやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられる、と母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおり始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二、三日前、台所で宙返りをして、へつつい角であれば骨を打って大いに痛かった。母がたいそうおこつて、おまえのようなものの顔は見たくないと言うから、親類へ泊まりに行っていた。すると、とうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかったと思つて帰つてきた。そうしたら例の兄が、俺を親不孝だ、俺のために、おっかさんが早く死んだんだと言つた。くやしかったから、兄の横つつらを張つて、たいへんしかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば、きさまはだめだ、だめだと、口ぐせのように言つていた。何がだめなんだか、今にわからない。妙なおやじがあつたものだ。兄は実業家になるとか言つて、しきりに英語を勉強していた。元来さつぱりしない性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしてた。あるとき将棋を指したら、ひきような待ち駒をして、人が困ると、うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手にあつた飛車を眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言つた。おやじが俺を勘当すると言いだした。

そのときは、もうしかたがないと観念して、先方の言うとおりに勘当される

□ 父

□ 母

□ (2) — 線①「母も死ぬ三日前に愛想をつかした」とありますが、母が生前「愛想をつかし」て口にした言葉を、文中から十七字で書き抜きなさい。

□ 父	□ 母
-----	-----

□ (3) 「兄」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。

□ Ⅰ 「俺」は「兄」をどんな性格だと思つていますか。文中から十六字で書き抜きなさい。

□ Ⅰ 「俺」は「兄」をどんな性格だと思つていますか。文中から十六字で書き抜きなさい。	□ Ⅱ 「兄」の外見上の特徴や趣味については、どう表現されていますか。文中から書き抜きなさい。
---	---

つもりでいたら、十年來召し使っている清という女が、泣きながらおやじに謝って、ようやくおやじのいかりが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじをこわいとは思わなかった。かえって、この清に気の毒であった。この女は、元由緒のある者だったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公まですするようになったのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんが、どういう因縁か、俺を非常にかあいがってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している

町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——この俺を、むやみに珍重してくれた。俺は、とうてい人に好かれるたちでない、とあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえって、この清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はときどき台所で、人のいないときに「あなたはまっすぐでよいご気性だ。」とほめることがときどきあった。しかし、俺には清の言う意味がわからなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思つた。清がこんなことを言うたびに、俺はおせじはきらいだと答えるのが常であった。すると、ばあさんは、それだからいいご気性ですと言つては、うれしそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造してほこつてるように見える。少々気味が悪かつた。

※1やに「いやに」。

※2女形＝女性の役をする、男性の役者。

※3へつつい＝かまど。火をたき、料理する設備。

※4言つけた＝言いつけた。

※5瓦解＝物事が壊れること。ここでは江戸幕府が滅びたことをいう。

(1) 「俺」の父（「おやじ」と母は、「俺」の将来について、どのように言っていましたか。それぞれ文中から十字以上十五字以内で書き抜きなさい。

□(4) 「俺」は自分自身をどんな性格だと思つていますか。文中から十五字で書き抜きなさい。

□(5) 「俺」のけんかつ早い性格がよくわかる一文を文中から二つ探し、その初めの五字を書き抜きなさい。

□(6) 「清」は「俺」のことをどんな性格だと思つていますか。文中から十字で書き抜きなさい。

□(7) 線②「自分の力で俺を製造してほこつてる」とありますが、どのようなことを表していますか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 「俺」は必ず大物になると、自信満々でいること
- イ 「俺」をあと押しすることで、満足していること
- ウ 「俺」の印象を勝手に作り、自慢げにしていること
- エ 「俺」の印象を作り変えようと、努力していること

練習問題 3

教科書

p. 271 上段 l. 12 ~ p. 272 下段 l. 10

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

卒業してから八日目に校長が呼びにきたから、何か用だろうと思って出かけていったら、四国辺のある中学校で数学の教師が要る。月給は四十円だが、行ってはどうだという相談である。俺は三年間学問はしたが、実をいうと、教師になる気も、田舎へ行く考えもなにもなかった。もつとも教師以外に何をしようという当てもなかったから、この相談を受けたとき、行きましよう⁵と即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲がたたったのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して、小言はただの一度も聞いたことがない。けんかもせずに済んだ。俺の生涯のうちでは比較的のんきな時節であった。しかし、^①こうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生といっしょに鎌倉へ遠足したときばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると、海浜で針の先ほど小さく見える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるかわからん。わからんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒くさい。家を畳んでからも、清の所へはおりおり行った。清のおいというのは、存外¹⁵結構な人である。俺が行くたびに、おりさえずれば、なにくれともてなしてくれた。清は俺を前へ置いて、いろいろ俺の自慢をおいに聞かせた。今に学校を卒業すると、麴町辺へ屋敷を買って役所へ通うのだ、などとふいちようしたこともある。独りで決めて一人でしゃべるから、こっちは困って顔を赤くした。それも一度や二度ではない。おりおり、俺が小さいとき寝小便をしたことまで持ち出すには閉口した。おいはなんと思つて清の自慢を聞いていたかわからぬ。ただ清は昔風の女だから、自分と俺の関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら、おいのためにも主人に相違ないと合点したものらしい。

□(1) — 線① 「こうなると」とありますが、どうすることを指していますか。

□(2) 「俺」は、「清」をどんな性格だと思つていますか。文中から二字で書き抜きなさい。

□(3) — 線② 「おいこそ、いつらの皮だ」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。

- Ⅰ 「おいこそ、いつらの皮だ」には、「俺」のどんな気持ちが込められていますか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。
 - ア 「清」に同情する気持ち
 - イ 自分自身をあざける気持ち
 - ウ 「おい」に同情する気持ち
 - エ 自分をけんそんする気持ち
 - Ⅱ 「おい」にとっては、どのようなことが「いつらの皮」のですか。次の□に入る適切な言葉を文中から書き抜きなさい。
- 清の、□ という考え方

□(4) □に入る言葉として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答え

